

史跡踏査委員会

第四六回夏季県外史跡踏査報告

「奥州藤原氏三代榮華の足跡と鎮守府胆沢城跡を訪ねると共に 奥州市の排出した偉人をたずね、古代く近代の岩手県の実像を探る―平泉、胆沢城跡、水沢方面―」

川崎市立川崎総合科学高校 阿部 功嗣

行程

第一日目（八月二一日）

横浜駅―平泉・柳之御所跡、柳之御所資料館―無量光院跡―毛越寺、観自在王院跡―長者原廃寺跡―宿泊地（ホテル武蔵坊）

第二日目（八月二二日）

宿泊地―中尊寺（金色堂、讚衡蔵）―奥州市埋蔵文化財調査センター、胆沢城跡―水沢・後藤新平記念館―（各自昼食）―斎藤實記念館―高野長英記念館―横浜駅

三五度という暑さの中、東北道を北進し国見サーブエリアで各自昼食、奥州軍と鎌倉軍の攻防地、阿津加志山を車窓から確認。岩手県境にて雲行きが怪しくなり、激しい雨中での平泉入りとなった。

一 平泉（柳之御所跡・無量光院跡）の踏査

平泉町は東北地方のほぼ中央、岩手県南部に位置する。東には北上川が南流し、北は衣川、南は磐井川に挟まれ、比較的開けた丘陵地帯である。平泉前沢インターチェンジにて東北道を降り、国道四号を南下して平成九年に国指定史跡となった柳之御所跡へと入っ

た。一関遊水地事業と国道四号バイパス工事に伴い昭和六三年より開始された発掘調査は、平成一九年で第六八次を数える。以来重層的に広がる建物遺構や膨大な量の遺物が出土し、『吾妻鏡』に「平泉館」とされる奥州藤原氏政庁中心であった可能性が高まっている。柳之御所資料館にて講師の本澤慎輔氏（元平泉文化財センター所長）と合流し、館内に展示された種々の出土遺物を傍らに、藤原氏四代の生活・文化について解説を受けた。資料館を出て高台から遺跡全体を俯瞰したのち、北調査区へと向かった。北調査区は、北上川へ通じる自然の沢を整地して作られた船泊と推定されている。一二世紀後半の遺構面から漆器などが見つかっており、濠に渡された木道が出土することを期待していると調査担当者から説明があった。猫間が淵に通じる小道を抜け、江戸時代に栄えた旧街道沿いに西へ移動し、無量光院跡の発掘調査現場へと向かった。

無量光院は、『吾妻鏡』に三代秀衡が宇治平等院鳳凰堂を模して建立、新御堂と号したと著されている。昭和二七年の発掘調査以降、本堂、池、中島、土塁などが明らかにされ、東西二四〇メートル、南北二七〇メートルにおよぶ範囲は宇治の平等院よりも大規模であった。現在は水田として利用されている梵字ヶ池跡の外縁北側から東の汀線を追跡する発掘調査が進められていた。四囲を眺めると、西側の土塁が東北本線に分断されている様子をはっきり見て取れた。土塁下に通じた金鶏山方面からの導水路を昨年調査し、ろ過装置を二カ所発見したとのこと。礎石が点々と残された本堂跡において遺構の解説を受け、在りし日の本堂の様子を思い浮かべた。「地元の小学生が来ると、ここに十円玉の表にあるような建物が建っていたと説明する」との講師の言葉が印象に残った。

無量光院跡を北上し、「夏草や兵どもが夢のあと」の句碑や義経堂が立つ高館の麓で東北本線をこえ、金鶏山を右手に見ながら南下し国特別史跡・特別名勝の毛越寺へ向かった。

二 平泉（毛越寺・観自在王院・長者原廃寺跡）の踏査

『吾妻鏡』によると毛越寺は二代基衡の建立である。昭和二九年から始まる発掘調査により、記述と一致する平安時代の浄土庭園遺構の全貌が現れた。大泉が池の北側には嘉祥（嘉勝）寺跡、金堂円隆寺跡がある。南大門跡からみると、池の中島に渡された橋と円隆寺跡までが直線で並び、毛越寺の中心軸を構成する。土壇上で本澤氏から遺構について解説を受けた。礎石配列から三間の内陣と四間の外陣を持つ構造がよくわかる。両伽藍ともに一二世紀に特徴的な東西から南に折れてコの字型に開く左右対称な翼廊を持つっており、土壇上から南に面すると往時の様子を想像することができる。西へ進むと、発掘調査で発見された遣水遺構が見事に復元されている。華やかな曲水の宴の様子が目に浮かぶようである。遣水に渡された橋上にて、発掘調査当時の沸き立つような興奮に耳を傾けた。

池の出島組石の前で集合写真を収め、毛越寺の東隣りに位置する観自在王院庭園跡を見学した。そののち北上して衣川を渡り、一日目最後の踏査地となる国指定史跡長者原廃寺跡へ向かった。

中尊寺の北約一キロメートルを東流する衣川の左岸に位置するこの地域は、上流の衣川柵をはじめ、一〇〇―一世紀前半の土器が出土する接待館遺跡など密集する多くの遺跡から、安倍氏による奥六郡支配の本拠地と推定されている。長者原廃寺跡は江戸時代の記録により金売り吉次屋敷跡と伝えられていたが、本澤氏によると、発

掘調査で西側に残された土塁は版築による築地塀と判明し、礎石の配列からも、寺院か官衙クラスの遺構であることはほぼ間違いないとのことである。当地にて日没とともに一日目の踏査は終了した。

三 平泉二日目（中尊寺）の踏査

開館にあわせて八時から中尊寺入りし、国宝金色堂を見学、つづけて紺紙金字一切経をはじめ三千点以上におよぶ国宝や国重要文化財指定の仏像、仏具、武具等が納められている讚衡蔵を見学した。五月雨ではないが雨がしとしと降る中、芭蕉が目にした光景を偲びつつ月見坂を下り、「千歳の記念の地」をあとにして、東北自動車道を一踏水沢へと向かい北進した。

四 胆沢城跡の踏査

胆沢城跡は水沢インターチェンジから北東に二キロメートルほどに位置する。近接する奥州市埋蔵文化財調査センターに到着し、同所長の伊藤博幸氏から国指定史跡胆沢城の復元模型を前に、東北地方北部への城柵の広がりを見野に入れつつ、発掘調査により解明された古代東北地方の実態について解説していただいた。

胆沢城は延暦二一（八〇二）年に坂上田村麻呂によって作られ、大同三（八〇八）年には多賀城から鎮守府が移されてきたことが『日本後記』に記されている。高さ三・九メートル、一辺六七・五メートルの築地塀と深さ一辺九〇

堀の中央南寄りに
一～一．五メートルの堀
によって囲まれ、その内側

メートル四方で区画された政庁域が配置されている。南大門から殿舎にかけての大通りは、両脇が溝で区画された特別な空間として意識されており、この場所は投降した蝦夷を引見する儀式や、北方の特産物を交易品として持参した蝦夷に対し、建造物と広い空間の力によって朝廷の威信を示すために使われていたと推測される。後の源氏将軍による「駒引き」との関係も示唆されることであった。質疑応答の後に胆沢城跡現地へと移動するものの、アテルイの怒りを思わせるような激しい雷雨で、所員の小野塚さん、石田さんの解説によるバス車窓からの現地見学となった。

五 水沢地区の踏査（後藤新平・斎藤實・高野長英各記念館）

続いて奥州市水沢区市街地へと入り、水沢の三偉人と称される高野長英、後藤新平、斎藤實の記念館をめぐった。水沢は仙台藩支藩の水沢藩一万六千石の城下町で、藩主は伊達政宗の叔父留守正景に始まる家系である。高野長英は後藤新平の大叔父にあたり、後藤と斎藤は同じく水沢藩士の子で、藩学立生館で机を並べた。後藤新平記念館は水沢城本丸跡に位置する奥州市役所（旧水沢市役所）のほど近くに所在し、二階建ての館内には、「大風呂敷」と評される後藤新平の生涯が豊富な展示品によって紹介されている。「国家衛生原理」をはじめ、彼の豊富な論文の原稿や、日誌、書簡、そして愛用の鼻眼鏡。外務大臣、内務大臣、通信大臣、南満州鉄道初代総裁、台湾総督府民政長官、東京市長など、時代を彩る重要な肩書が数多く並ぶ。構想力豊かな時代の先覚者たる彼の生涯について深い感銘を受けた。学芸調査員の佐藤氏によると、台湾をはじめ国外からの見学者も後を絶たないとのことであった。

ここで昼食解散し高野長英旧宅など市街地を各自で見学、再集合の後は斎藤實記念館へと移動した。

斎藤實記念館は奥州市役所から三〇〇メートルほど西に所在する。学芸員の高橋氏によると、この敷地は斎藤實が春子夫人と老後をすごすために用意していた邸宅であり、實の死後に春子夫人が空襲から疎開してきたために多くの二・二六事件に関する資料や遺品が戦災を免れたことなどを解説していただいた。「自力更生」の精神を伝える資料や、二・二六事件の惨劇を直に伝える血染めの衣類、銃弾により破損した鏡など数々の遺品を間近に見ることができた。

悲鳴のような激しい雷雨の中、水沢公園の一隅に所在する高野長英記念館へと向かった。国重要文化財に指定されている「和蘭外科要方」など、長英関連資料五八点をはじめ多くの品々は、弾圧を受けてもなお長英が人々に慕われていたことを表物語っている。今野館長より、天保一〇（一八三九）年蛮社の獄に至るまでの長英の学究足跡や、脱獄後の日本各地への逃避行経路などについて、直筆の手紙や版本を傍らに解説していただいた。のちの後藤や斎藤など水沢人ばかりか、日本全国の幕末の志士へ示された、近代国家形成への確たる道標を強く感じ取る事ができた。

最後まで天気に悩まされながらであったが、平泉、水沢の荒々しくも、スケールの大きな人々の歴史を肌身で感じた今回の踏査も無事に終了となった。

